

野田一江さん●チアリーディングコーチ

ゼロから高校チームを日本一に導く

いつも笑って前を向こう。

GO・FIGHT・WIN!

まったくの未経験からチアリーディングの指導を始めて、8年連続高校日本一。持ち前のパイオニア精神で音楽家から鮮やかな転身を遂げた熱血コーチを、箕面自由学園にお訪ねしました。瞬時に相手を引き込む明るさと、真つすぐな人柄。生徒への思いは人一倍。ご本人が一番の、チアリーダー（応援をリードする人）でした。



のだ かずえ

1965年、大阪府生まれ。87年、同志社女子大学学芸学部音楽学科クラリネット専攻卒業。音楽教室講師、演奏家活動などを経て、90年、箕面自由学園高等学校非常勤講師。91年、チアリーダー部「ゴールデンベアーズ」のコーチに就任。全日本高校選手権優勝7回、01年よりジャパンカップチアリーディング日本選手権大会高校部門で8連勝中（通算10回優勝）。02年にはナショナルチームのヘッドコーチを務める。現在は同部専任コーチ。

暗中模索のコーチ修業

——先ほど練習を拜見しましたが、日本の演技を間近に見て感動しました。元氣な笑顔がとても素敵で、涙が出ました。

野田 あっ、泣かれる方は多いです(笑)。チアリーディングは、シンクロロナイスドスイミングやフィギュアスケートと同様、表現スポーツなんです。笑顔で高度な技を演じるには精神的な強さが当然求められますが、どんな子でも、ちゃんと

自分の役割を見つけられるのが良きなんです。ピラミッドの上には、小柄で身軽な子が乗る。大柄な子は支柱になる。そして年齢に関係なくできる。今や私たちがゴールデンベアーズを中心に、幼稚園、小学校、中学校、保護者のチーム、私の母も70歳で参加したビュティーベアーズと、それぞれの年齢に応じてチアを楽しんでいます。「ゆりかごから墓場まで」がモットーです(笑)。

——まったくのゼロからの出発だったと

伺いました。

野田 ここに勤めて2年目の時、アメリカンフットボール部が強くなってきたので、監督がチアリーダー部をつくってくれないかと。「クリスマスに東京である全国大会の決勝に出られたら、東京デイズニランドに連れて行ってあげる」という監督の言葉を聞いて、あつというまに動機不純な30人が集まりました(笑)。4月にクラブとしてスタートはしたけれど、誰もチアなどやったことのない者は

かり。そこで、音楽の非常勤講師だった私に「発声ぐらいなら教えられるだろう」と声がかかり、軽い気持ちでお手伝いを引き受けたんです。

——どのようにクラブを育てていかれたのですか。

野田 私もチアは未経験でしたし、スポーツも中学時代に「エースをねらえ!」に影響されてテニスをしただけ。最初は何をしていたのか、さっぱり分かりませんでした。監督からマンツーマンでアメフトのルールを教わり、毎週大学の試合を観戦して同志社や立命館のかっこいい応援をビデオに撮り、生徒たちと見よう見まねで練習していたような感じです。ブラスパンドの演奏はその場で楽譜に写して、発足したてのうちのブラスパンド部に練習してもらいました。

そんな状態で3泊4日の研修キャンプに部員数名と参加したところ、いきなりハードな練習が始まってびっくり。専門用語も全然知らないんですから。「ライندگان」と聞いて、てっきり脚を上げる宝塚歌劇のようなダンスと思ったら違った(笑)。同宿していた他大学のコーチに初歩から教えていただき、何とか研修を続けたような次第でした。

それからは、撮りためたビデオを生徒

たちと一緒に見て練習したり、一日講習会に参加したり。私もコーチ法を懸命に勉強して、3年目には日本チアリーディング協会の指導者資格クラスを取得しました。5年目で初めて出場したジャパンカップでは予選落ちでしたが、翌年は3位。このことから部員たちの間にも、もうちょっと頑張ろうというムードが高まってきたんです。

予想外の敗北が コーチとしての成長を促した

——コーチとして独り立ちできたと思えたのは、いつごろですか。

野田 何をもって独り立ちと言っているのか分かりませんが、創部6年目で高校日本一になり、7年目の5月に、大学生や社会人も含めた全日本選抜選手権大会で優勝したんです。その年の夏のジャパンカップでは当然私たちが優勝するだろうと、誰もが思いました。ところが6月の関西大会のリハーサルで、けが人を出してしまいました。それでも8月の本大会には何とか行けて、準決勝では完璧な演技で1位。やっぱり優勝だと思っていたら、決勝ではぼろぼろになって4位に終わりました。

——敗因は何だったのでしょうか。

野田 私も若かったから、最初は生徒との距離が近すぎたんです。彼氏の話を聞いたり一緒にご飯を食べにいったりして、とても仲良し。しかし生徒にけがをさせてしまったのは、私のやり方に問題があったのではと考えたんです。それに私は、子どもたちの力以上のものを練習に組み込んでいたのではないかと。けがをした子どもがそれでもやりたいと言えば、そこまで言うのならと、情が先に立つこともありました。

ジャパンカップの決勝前夜も、私が3年生部員一人ひとりに「みんなのことが大好きだから」と手紙を書けば、「先生のために頑張ります!」と応えてくれた。そんな青春ドラマのような絆だったからこそ、一つ何かが崩れた時に脆かったのだと思います。それほどまでにメンタルなスポーツなんです。そこから私のクラブに対する考え方が変わっていきました。次の学年からは生徒たちと少し距離を置くようになったんです。

——「お姉さん」ではいけない、と。

野田 そう、「コーチ」にならなければ。子どもたちがどんなにかわいくても、日本一になりたいければ、そのための練習をしなければいけないと思つて、結構怖いコーチになつていきましたね。情にも流

されない。3年生は全員一軍に上げたいけれど、力のある者しか使わない。だから今は、1年生で一軍に上がる子がいれば、3年生でも一度も大会に出ない子もいます。しかしチームが日本一になれば、試合に出られなかった子も大きな誇りを持って社会へ出ていける。すごい自信になると思います。

あの時の3年生は、今やライバル校やうちの中等部のコーチとして、良い指導をしています。彼女たちは優勝するとはどういうことなのか分かっていているからこそ、突き詰めて考えることができる。私も彼女たちもあの予想外の敗北を、きつと今も引きずっているんじゃないか。

——挫折と大きな変化を経験された。逆に、変わらないものもありますか。

野田 私が素人だったので、難度の高い演技を、そのしんどさが分らないまま生徒にさせてしまえるのは今も強みです(笑)。生徒たちも何となく「先生ができると言うんやから、できるんや」と思っている。そうして毎年のように日本初の技を繰り出しているから、生徒たちにも「私たちがパイオニアでなくてはいけない」という自負が育っているようです。もしも私がブラスバンド部を指導していたら、きつと自分が音楽を教わったよう

にしか教えられなかったと思うんですね。門外漢だったからこそ柔軟な考え方ができたのではと、今になって思います。

音楽家としての経験が 独創的な演技を生む

——大学で音楽を学ばれたことは、チアリーディングの指導に役立っていると思われませんか。

野田 私の演技構成は運動部出身の人のそれとは違うと、よく言われるんです。演技で使う音楽は前後半それぞれ45秒ずつくらい。その短い時間に、ぎゅつと凝縮させなければならぬ。リズムよく進めながら、どこでメリハリを効かせるか。なおかつ全体として、まとまっているか。音楽の完成度に私の経験が生かされていると、皆さん言ってくださいます。

——現在、音楽との関わりは。

野田 コーチになってから、28歳で演奏家活動や音楽教室での仕事もすべて辞めたのですが、なみはや国体の開会式の演出に関わった時、私が小学校で吹奏楽をしていた時の恩師に偶然お会いしたんです。関西吹奏楽連盟の理事長をしておられた方なので、以来、吹奏楽のイベントにうちのクラブを呼んでくださるようになりました。「3000人の吹奏楽」や

宝塚歌劇場で行われるアマチュア・トップ・コンサート、あの淀川工業高校吹奏楽部の定期演奏会など、生徒たちは大舞台をどんどん経験させていたたいいます。何千、何万という観衆の前での演技は大きな刺激になって、生徒たちをたくましくします。私が音楽をしていたために、チアリーディング以外の世界の方にも受け入れていただけたんですね。本当にラッキーでした。

親はクラブ全体を通して 子どもの成長を見てほしい

——厳しい指導に、生徒さんたちはしつかりついてきていますか。

野田 今の子どもたちは打たれ弱いですが、今年で創部18年目ですが、5年前までは退部者が一人もいなかったのに、それ以降、毎年数人ずつ、やめる生徒が出てきました。やっていることは以前とまったく一緒なのに。そんなに時代の変化というものがあるのかなと驚きます。

——何が原因なのでしょう。

野田 私にも子どもがいますが、今の親は腫れ物に触るように子どもに接していませんね。だから子どもは、集団に入っても、叱られたり挫折を経験したりしても、それを真つ向から受け止められない

んですよ。叱られている自分と向き合えないから逃げ出してしまふ。怒られることにも他人と競争することにも、全然慣れていない。昔は優秀な子ならば、敢えて一軍から二軍に落として這い上がってくる過程を待ったものですが、今は二軍に落とすとそれつきりです。親の育て方や学校教育が、たぶんそうさせてしまったんだろうなと思います。親御さんも、この5年でガラッと変わりましたね。昔は「何があってもお願いします!」とおっしゃっていたのが、今は何かあると、すぐに苦情を言いこられる。私は頑として、はねつけますけれど。

ある時も、やめたいと言う生徒がいました。親御さんは慌てて学校に来られて、練習や礼儀の指導が厳しすぎるのではないかなど、ご自分の言いたいことだけをおっしゃる。で、私にどうしてほしいんですかと尋ねると、日本一を目指して子どもに続けさせてほしいと(笑)。その生徒は私と話をすると考え直してくれましたが、今は親御さんが自分の子どもを説得できないんです。

——そのような保護者の方々には、どう対処されますか。

野田 最初に「チアリーディングとは」という心得を作って読んでいただき、理

解していただいた上で子どもさんを送り出してくださいとお願ひしています。私たちは仲良しクラブではありません、日本一を目指しているんです、いやなら、やめてくださいと。私たちは下を向きながら前には進めないし、やる気のない一人のために、何十人も士気を下げることはできません。けがにつながる恐れもある。私は多くの子どもたちの命を預かっているから、妥協はできないんです。保護者の方々には、自分の子どもの話を聞くだけではなくて、ぜひクラブ全体を目を通して子どもの成長を見てほしいんです。そうすれば、どんな環境で生徒たちが練習に励んでいるか、その中で自分の子どもが歯車の一つとして、どのようにな大切な役割を担っているかを理解していただけるはずですよ。

自分で限界を決めず いつも心を開いておこう

——こうしてお話を伺っている間も、生徒は自主的に練習を進めているようですね。非常に主体性のあるクラブですね。

野田 チアリーディングは、いったん試合が始まればコーチは何もできません。試合の途中で何かが起こっても、子どもたちだけで何とかする力をつける必要が

ある。だから今は、最初に私がその日のポイントの説明をした後は、生徒たちが自主的に練習を進めています。

——普段から大切にしておられることは。

野田 常に心と体の準備をしておきなさい、手を抜いたら全部自分に返ってくるよと言ひ聞かせています。自分の限界を自分で決めるな、楽しいだけでは強くない、苦しさを乗り越えた時に強くなるのよ、と。そのためにも心を開いて人の話を聞こうと呼びかけています。あとは謙虚さを常に持ち、支えて下さる方々への感謝の気持ちを忘れないということですね。

——同志社人へのメッセージでもありませんか。

野田 新しい卒業生の皆さんには、自分の可能性を広げ続けるために、少々かっこ悪くても、笑って前を向いて歩いていただきたいですね。私は子どもたちに、いつも笑っていないさいと言ひ聞かせています。最初は笑えなかった子が、数か月も経つと笑顔で演技をしています。驚くような成長を見せてくれる。今は生徒と一緒にいることが、とても楽しいんです。

(聞き手・當村まり、2008年10月30日・豊中市)

長屋博久さん●学生服販売店取締役

「服育」を通して子どもたちを啓蒙する

近年「食育」が盛んですが、「服育」という言葉をご存知でしょうか。子どもたちは、一着の制服を通して社会性や思いやりを学び、古着のリサイクルの話から環境問題を考え始めます。常に自分のできることは何かを模索しながら、子どもの未来への種まきを続ける卒業生をご紹介します。



ながや ひろひき

1970年、京都市生まれ。93年、同志社大学法学部法律学科卒業。同年、日本毛織株式会社に入社、業務用・家庭用カーペットの商品開発・営業などを担当。退職後、実家の学生服専門店である有限会社村田堂に勤務。現在、同社取締役。京都市の子どもの未来を共に考え、行動する市民ネットワーク「人づくり21世紀委員会」幹事長、京都市PTA連絡協議会副会長、京都市幼稚園PTA協議会会長。

服は社会を学ぶ「教材」

——まず「服育」について、ご説明いただけますか。

長屋 本来、制服はフオーマルウェアです。ところが最近、制服を着くずしてカジュアルウェアのように着る生徒たちがいます。家で私服を着て自分を自由に表現するのは個性ですが、通学に着る制服は、いわゆるオンタイムの服。やはりルールやドレスコードに従うべきものなんです。服とはTPO（時、場所、目的）

や生活習慣に合わせた着方が必要なんだ、社会性が求められるものなんだというのを伝えたいと思ったのが、僕が服育を始めた一番のきっかけです。

「服育」はある会社が使いた言葉ですが、僕が服から学んでほしいのは、社会性、環境問題、服の素材や歴史という、三つの問題です。2005年から年間4、5校、中学や高校へ出前授業に行っていますが、服本来の意義や社会性を教える授業のニーズが今は最も高いです。

——生徒たちの反応はいかがですか。

長屋 中学生にとっては、TPOという言葉や、オンタイム、オフタイムというはじめの話などは新鮮に聞こえるらしいですね。結構素直に聞き入れてくれます。高校生の反応には、ちよっとしんどいものがありますけれど（笑）。でも制服を着くずした生徒さんには、はつきりと「それは格好悪い」と僕は言います。

——制服のもつ社会性については、具体的にどのように説明されるのですか。

長屋 服というのは、自分のためだけに

着るものじゃないんですね。自分と同じ空間にほかの人がいるのなら、そこでTPOに合わせた服を着ることは相手に対する配慮であり、思いやりです。だから必要なんだと。最近、中学校で就業体験をしていますね。コンビニで働いてみたりとか。その直前に服育の授業をして、自分たちがいつも着ている服と接客との関係を考えてみるんです。生徒たちがお客さんになり、先生に着くずした姿で登場していただく。それが不快だと感じたら、自分たちが接客する時にはどうすればいいかを考える。学校の外の実社会と絡めて話すと、理解しやすいようです。「人は見かけによらない」という言葉がありますが、どうしても第一印象は見かけで判断される。付き合っつてこそ人間味は徐々に分かってくるけれど、最初は見かけで判断されることも、子どもたちには分かってほしいです。

「番組小学校」を生んだ京都で一市民として教育に携わる

——学校側は、制服の意味をどう捉えているのでしょうか。

長屋 社会性を学ぶ教材としては、あまり見ておられないように感じますね。保護者の経済的な理由も大きいですが、私

服にする指導が大変になる。生徒さん個々の価値基準が幅広いから、制服の方が指導がしやすい。そんな理由が大きいように思えることもあります。僕の考えを分かってくださる先生も多いのですが、実際そこまで子どもたちに伝えきれないのが現状だと思います。同志社のように、自分で考えて行動して責任を取るという、自主自立の精神を持った子ばかりならいいんですけど。僕はPTAをしているので、現場の先生方のご苦労もよく分かるんです。学校ではいろいろな問題があるから、制服のことはどうしても優先順位が低くなりがちなんです。だから、僕たちができることは僕たちに任せてもらって、一緒にやりましょうというのが僕の考え方です。

僕たちは、一保護者であり、地域の人間であり、一企業人でもある。教育について僕は学校とか企業とか、あまり分けなくてもいいと思うんです。「京都の子どもたち」という視点を持って、自分ができる時にできることをやればいいという思いがある。僕など、能力はなくてもたとえばネットワークを持っていれば、それを使って何か役立つことをすればいい。それで子どもや街が元気になってくれれば、うれしいです。

——服育も、一人ひとりの親がしなないと

いけませんね。

長屋 「番組小学校」の歴史がありますからね。明治初期、「竈金」といって、各家庭のかまどの数に応じてお金を出し合い、市民が小学校をつくった。行政主導じゃなくて、子どもに教育を受けさせたいという市民の思いが学校をつくったんです。だから地域全体で子どもを教育しようという風土、精神が、薄くはなつたけれども今も残っています。

僕たちは、一保護者であり、地域の人間であり、一企業人でもある。教育について僕は学校とか企業とか、あまり分けなくてもいいと思うんです。「京都の子どもたち」という視点を持って、自分ができる時にできることをやればいいという思いがある。僕など、能力はなくてもたとえばネットワークを持っていれば、それを使って何か役立つことをすればいい。それで子どもや街が元気になってくれれば、うれしいです。

子どもの言うとおりに作ってあげて」とおっしゃる方がおられて、びっくりします。——時代とともに子育てが変わってきたのでしょうか。

長屋 今の時代が悪いんじゃない、いま子育てをしている親が子どもだった時代の話に溯り、さまざまな環境の変化が積み重なって、現代の社会現象が起きているように感じます。この間、ある方がおっしゃっていましたが、小さいころからテレビを観る環境ができてきたのが60年代。僕たちが子どものころには、さらにテレビゲームが出現して遊び方が変わってきた。そういう社会環境で育った親の年代によって、子育ての方法も変わり、家庭の環境も変わってきた。テレビを観て育ち、自由主義の中で育った人が子育てをして、「みんなが」というより「自分が」という意識が強くなり、子ども全体というより「自分の子ども」を限定的に見る世代になっているのかもしれない。

未来の消費者となる子どもたちに服とエコの関係を教え続けたい

——環境学習では、どんなことを教えておられるのですか。

長屋 古着の行方とリサイクルの話で、**テレビを消して親の絆を取り戻そう**——服育のほかに、さまざまな活動をしておられますね。2008年は幼稚園児の保護者に向けて「ノーテレビ・ノーゲーム・デー」を提唱されました。

長屋 僕が会長をしている京都市幼稚園PTA協議会が、9月から呼びかけを始めました。家庭内のコミュニケーションを増やそうというのが、ねらいです。月に一度くらいテレビを観ない日をつくり、昭和30年代ぐらの生活に戻ってみる。親と子が密接に関わることから、何が変わる可能性があると思います。アンケートの回答を見ると、「あれから週に一度、ノーテレビ・ノーゲーム・デーをつくっています」という親の声や、「親が遊んでくれるから楽しみ」という子どもの声があって、予想以上に反響があります。テレビの視聴時間が日に1時間ずつ減ったという声もありました。——ご自身のご家庭ではいかがでしたか。

長屋 その日帰宅したら、テレビ好きの父がテレビを観ていなかったんですね。聞けば、幼稚園から帰ってきた下の子に

す。繊維メーカーにいた時、回収してきた服からできた綿の用途開発をしていたんですね。古着は回収したら綿に戻しますが、その後の利用法がほとんどないんです。今も日本の繊維廃棄物の9割は埋めるか燃やすかで、車の内装材ぐらいいかりサイクルの道がない。産業廃棄物として有価で処分しないとけないから、古着回収業も成り立たない。加工すればするほど、お金もかかります。

でも会社を辞めて実家の店に戻った時、やっぱり自分で売ったものは最終的に自分で責任を取って、リサイクルしたいと思っただけですね。それで勉強して、たまたま西宮のNPOを紹介していただいたのがきっかけで、中学校へ服と環境問題の授業をしに行きました。生徒たちの反応はよかったです。自分の着古した服がどうなるかなんて、みんな考えたこともないでしょう。ほとんどが捨てられていると話したら、びっくりして「もったいない」と。じゃあどうすればいいだろうね、という話をするんです。

——子どもの感覚は素直ですね。**長屋** 純粹ですね。大切なのは消費者の意識が変わること。エコへの意識が高まれば、少々見栄えがよくなっても、処理費用がかかるから少々割高でも、お金を

「おじいちゃん、今日はテレビ観たらあかん日やで」と、消されたらしい(笑)。ああ、子どもの感覚ってこんなものなんやな。テレビは必需品だと大人は思っているかもしれないけれど、子どもはそうでもないんですね。積み木で遊び出したり、本を読んだりする。もっと楽しいことがあれば、子どもはそっちの方がいいんですよ。テレビを消すことによって、親もそういう子どもの関心を認識して子育てする。親子の絆も深まる。結果として、地球環境にも優しい家庭づくりができるんじゃないかなと思っています。

仲間から刺激を受け自分の役割を考えた学生時代

——大学時代のお話をお聞かせください。

長屋 卓球部に所属していたんですが、けがも原因で3年次の夏からは主務、つまりマネージャーをしていました。この時、体育会本部の役員やほかのクラブの主務たちと仲良くなり、いろんなことを学びました。日本の大学スポーツの衰退を憂い、国際交流委員会の2期生としてアメリカへ視察に行ったことも。この時の仲間とは今も交流が続いていて、刺激を受けています。僕の財産です。

出してリサイクル商品を買うようになるんです。まだ日本はそこまで行っていませんけれど。僕の具体的なプランはまだ途上ですが、例えば綿製品なら、ほぐして紙を造るとかね。そういうことを子どもたちから教えていきたい。僕たちやNPOさんがこつこつと教えていけば、10年後、20年後、大人になった彼らの消費行動が変わる可能性があるんです。親である僕たちの世代は生活習慣が決まっています。なので、なかなか意識を変えにくい。地球温暖化やCO₂削減の話も聞いて、普段の生活の中では危機感や実感に乏しいでしょう。でも中学生くらいの子は「何かをしないとけない」と、本気で思ってくれます。この環境教育の活動は、イベントなども含めて年間約10回行っています。

——生徒さんが自分で気付き、自立する。まさに同志社の教育理念にふさわしい授業ですね。

長屋 「education」は日本では「教育」と訳されているけれど、語源とされる「educare」には「潜在しているものを引き出す」という意味があるんです。教育とは本来、子どもたちが自主的に学び、成長することではないでしょうか。「教える」のではなく、気付きのきっかけをつくる

——どんな影響を受けられたのですか。**長屋** 周囲にはリーダーシップや才能のある人間が多かったから、じゃあ僕自身は何ができるか、自分の役割は何かを考えたわけです。自分にできることが見極められたら、それをこつこつやってみる。卓球では貢献できないから、選手たちが万全の態勢で試合に臨めるようなバックアップをすれば、チームは強くなる。僕は今いろんなグループに所属していますが、そこで自分の役割は何かを常に考えていますね。そして中途半端はいやなので、やはり、こつこつやっています。

——まさに「地の塩」ですね。**長屋** 誰にでも、ふさわしい役割は必ずあるんです。それに気付くか、気付かないか。学生時代から思っているんですけど、僕はリーダータイプではないんですよ。主務が自分に合っていると思ったし、そういう役割が心地よかったです。今は会社やいろんな団体のリーダーなので、そうは言っていられませんが(笑)。自己矛盾は抱えながらも、有言実行。あとは、やるしかありません。

——本日はありがとうございました。(聞き手・當村まり、2008年11月7日・京都市)